

途上国の校舎建設への新しい協力活動—その現地報告— —国内学生ボランティア団体の ラオス共和国校舎譲渡式への同行参加をもとに—

大 隅 紀 和

(京都教育大学名誉教授、OES研究所代表)

筆者は2011年1月8日から3月4日の間、タイ、ラオス、カンボジア、マレーシアの4か国の教育事情の調査研究に出かけた。そのうち1月30日から2月2日の間、ラオス人民民主共和国(以下、ラオスと記す)北部で日本の学生ボランティア2団体による校舎建設の譲渡式に同行参加する機会にめぐまれた。現地はプランババーン県都から北13号線を車で約2時間、山間にある小村のひとつホエイカン村(B. HOUAYKANG)だった。

教育協力の一環として校舎建設は、これまで多くの国で実施されてきている。その多くは、国際協力機構 JICA による無償援助、あるいは現地大使館を通じて行う草の根無償による事業として知られてきた。筆者の知る限りでもネパールとスリ・ランカでは前者によるもの、タイでは後者によるものを見てきた。それに加えて最近では NGO や NPO、ボランティア団体、ライオンズクラブやロータリクラブに加えて個人の篤志家によるものなども増えてきている。

ここで報告するラオスの事例は、「爆弾ではなく学校を、地雷ではなく教科書を！」を標榜している NPO 法人 DEFC^(*) の支援のもとに、学生ボランティア団体が校舎建設に資金を調達し、協力参加してきている。このような行き方は、これまでの教育協力の常識を変える画期的な取り組みだと思われる。本稿では、その概略を報告し今後の途上国の校舎建設に向けた協力活動の参考に供したい。

I. 校舎建設を実現させた学生ボランティア団体

1. 資金調達した学生ボランティア2団体

ホエイカン村に校舎建設を実現させたのは、二つの学生ボランティア団体である。

一つは「CHISE」(チーズ)、代表者は大坪弘子さん(神戸市外国語大学)、そして「夢追人」(ゆめおいびと)、代表者は久保圭介君(関西学院大、システム理工学部)である。

今回のホエイカン村の譲渡式に参加したのは、二つの団体から男性10名、女性11名。それに、この計画の実質的な推進役を務めてきた神戸に本部を置く NPO 法人 DEFC (地雷よりも教育を) の理事長、沢田誠二京都教育大学名誉教授。前年2010年8月に実施された事前状況の視察にも参加し、もっぱら写真とビデオ記録に携わった家常敦夫氏、さらに、この時期バンコクに滞在していた筆者をふくめて、総勢24名だった。

参加した学生の所属大学は大阪大、関西学院大、関西大、同志社女子大、阪南大、神戸市外国語大、名古屋学芸大、獨協大、千葉大と多彩だった。それに名古屋でカフェのスタッフという女性、パン屋をしているという男性も参加していた。

2. 二つの学生団体の共通目標は、ラオスに校舎建設

「夢追人」は、そのホームページによると大阪を拠点に全国各地で活動するとしている。全国各地にいる賛同メンバーのもとで

説明会を開いて、みんなで100円を拠出する輪を1万5千人に広げて、150万円の資金を目標に校舎建設の資金を集めようとしてきた経過がある。ただし、たんなる募金活動やイベント収益はしないという行き方をしている。実際には目標の半分、75万円が集まった時点で、CHISEとジョイントして校舎建設を実現させている。

「CHISE」は、その活動をブログで見る限り、ラオスに校舎建設をすることを目標に神戸三宮を中心に関西の学生15人で活動中(2010年12月20日付け)としている。ブログは2009年10月から書き込みがあって、この時点で1年5か月が経過する。主要な活動は大阪万博公園、神戸市立外国語大学学園祭、京都工芸繊維大などでのフリーマーケット、ダンス・イベント、ピラ配りなど、あらゆる機会を使って文字通りゲリラ的活動をしてきている。

3. 筆者が同行した校舎建設のサイトー ホエイカン村

ホエイカン村は、ラオスの古都で世界遺産にも登録されているプランパバーンの中心地から北東に車で約2時間の距離にある。

ルアンパバン空港からは13号線北へ車で直行すると約1時間半、80km地点の国道とウー川間のあまり広くない傾斜地にある。



写真1

道路脇にくっつくようなホエイカン村

以下、後述する沢田氏によると、2009年時点で64戸310人。うち女子151人で、カム族の村であるという。田畑はほとんどなく、主として山林労働と家畜にたずさわっている。

ホエイカン村の学校の校舎はもともと1部屋のみで1、2年生30名が通学していた。その内訳は1年生16名、うち女子8名。2年生12名、うち女子5名の複式学級である。3年生から5年生は隣村の学校に通学している。

はじめて訪れた筆者には、簡単な舗装道路にしがみつくように貧弱な家が点在している。頼りないほど細い電柱には、わずかな電線が走っていて電気は通じている。テレビを持つ家をしだいに増えてきているが、もちろんブラウン管式である。冷蔵庫は村長の家にはあったが、ほかの家はまだほとんど備えていないという。

もちろん給排水はない。近くの川からの汲み水に頼っている。ごく粗末な集会場があるものの、ほかにほとんど目立った施設はない。

村を歩いてみるとニッパヤシの屋根と壁の家が多い。村長の家が一部石積み。それも床は簡単なタイル張りだが、土間同然。板切れを素人大工で作った階段があって二階に登るようになっている。トイレは貧弱



写真2

完成した新校舎

前庭スペースが広く、スポーツや集会ができる

なニッパヤシで囲みが作っており、汲み置きの水をすくって流すものである。

日が落ちると、あちこちに細々とした明かりがとめる。街路を自由に歩くことも覚束ない。筆者は沢田氏と共に村長さんの家に泊めていただいたが、わずかな電灯の明かりがあるものの外のトイレには、手さぐりで行くことになる。

数年まえに中国の援助でプランパバーンからウドムサイに通じる対向一車線の舗装道路が通じている。その道路肩は、なだらかに砂利がむき出しになっていて車が通るたびに土埃が舞い上がる。

4. 学生2団体の資金による新校舎の完成

完成した新校舎は、北13号線の道路に面して、30メートルの幅のアプローチがある。ゆるやかなスロープ状の広場を150メートルほど入った場所で完成している。この前庭ともいえる部分は、砂利ながら屋外での運動や集会スペースとして十分な敷地がある。

新校舎は緑の丘陵が背景になっていて、平屋建てながらえんじ色の屋根が、黄色の壁面とつりあっている。青空と緑の木々の背景に栄えて堂々たるものに見える。近づいていくと、およその見積もりで横幅50メートル、奥行き8メートルほど。レンガ積みにもルタル壁。屋根はスレート瓦葺き。

標準的な日本の教室で言えば3教室か4教室が連なったものに相当する。天井はななく骨組みがむき出しだが、あまり気にならない。正面に掲揚台があって、国旗がへんぼんと翻っている。

大きなほうの一室は、中央で間仕切りすれば2教室のスペースになる。これは前後に黒板を配置することになっていて、そのままオープン・スペースで使えば、今回の譲渡式で使われたように室内での集会場になる。

これに、もう一教室分が連結している。トイレは、すぐのところにドア付きで2個

分が設置されている。

5. 校舎譲渡式、パーシのお祝い、そして・・・

今回の校舎完成は現地の子どもたち、父母たち、住民たちに与えたインパクトは絶大なものがある。また、校舎完成を実現する資金を調達し譲渡式に参加した学生たちにも、極めて大きな効果をもたらす。両者はともに生涯忘れ得ない記憶として残るはずである。

ここにこそ、仲介役として陰になり日向になり、実現のための基礎的な役割を果たしてこられた沢田誠二氏、サイサモン女史(後述)、NPO法人DEFECの関係者、そして建設作業にかかわってきた多数の村人たちの喜びがある。

(1). 子どもと村人で一杯になった教室

学生たち、そして私たちを乗せたバスが到着したとき、すでに待ち焦がれていた子どもたちや村人が大勢迎えてくれた。

完成したばかりの二教室分のスペースが譲渡式の会場になっていた。正面には郡の教育長、村長など。そして日本側は「CHISE」代表の大坪弘子さん、「夢追人」代表の久保圭介君がならんだ。会場のなかに入りきれない人たち、子どもを抱っこした村人や子どもたちが窓という窓に鈴なりになった。

これまでにも、いくつもの国で同じような光景をみてきたが、このホエイカン村の小学校の光景には、大きな熱気が感じられた。日本から来た20名を越える学生たちが参加しているという若いエネルギー、そして校舎建設のための整地と建設作業に汗を流した多くの村人たちの思いが、会場に満ちていたせいにちがいない。

(2). 感きわまった喜びの涙

何かと言えば、これまでとおなじように「最近の若者は」などと言われるが、譲渡式では学生たちの変わらない気質を見る思いだった。型通り、司会役の進行で教育局からの挨拶、村長のお礼につづいて「CHISE」

の大坪さんが挨拶をした。彼女の子どもたちと村人たちへの簡単な日本語の挨拶をラオス語に通訳したのはルアンパバーンから同行したまだ若いヴィトン君だった。このとき、感きわまったのか彼女は涙が込み上げてきて、しばらくは話せなくなった。

筆者は長く大学教師をしてきたが、若い人が感極まって涙を流す場面は、久しいものだった。こちらもらい泣きしそうになったが、それはまことに爽やかなものだった。

(3). 7千5百人の名簿ボード

つづいて立った「夢追人」の久保圭介君も、神戸の街頭でチラシを配る活動をしたとき、せっかく作ったチラシを心ない人が破り捨てたこと、「お前たちなんぞに、ラオスで校舎建設が、できるものか」と罵声を浴びたことなどを話した。5、6人の仲間が用意してきたボードには、100円募金に応じた人たちの名前が一人ひとり記名されていた。これを前にして大柄の彼も、それまでの苦勞を思い出したのか、思わず泣き始めてしまったのだった。

つたない通訳では、正確に伝わったかどうか危ぶまれる。しかし、その場の雰囲気から子どもたちも村人のなかにも涙ぐむ姿が見られた。

翌日の午後、私たちが教室を去るとき、学生たちの手でこの記名ボードが教室の壁に掲示された。まさか神戸近辺で100円玉を提供した人が、自分の名前が遥か遠くラオスの僻村の教室に掲示されることになるとは、恐らく想像もできないことだろう。子どもたち、そして村人たちにとって、多数の日本の人々の善意が新しい教室を建ててくれたことを長く記憶するに違いない。

(4). パーシのお祝い

パーシはラオスで行われる出生、新年、結婚などの伝統的なお祝いとされる。この日の校舎完成にもパーシが用意されていた。托鉢に使われる鉢に米を詰めて、花やバナナの葉で作った飾りがいっぱい。数本の細

い竹に白い木綿糸が結ばれていて、まるで満艦飾のようになっている。これを中心に村人が集まってくる。それを取り囲むようにして、大勢の子どもたち、学生たち、そして私たちも加わる。やがて村長が祝詞と思われる祈りをささげ、村長の手で鉢のなかの米がパツと参加者に振りまかれる。

そして木綿糸が巻き付けてある竹串を取って、近くの人の手首に巻き付ける。それが伝搬していく。腕を出していると、手首にはつぎつぎに何本もの木綿糸が巻きつけられて、これが人と人を結ぶ絆を表していると言われる。

学生たちは、誰もかれも村人からも子どもたちからも木綿糸をたくさん巻き付けられていた。やがて夕間近くに迎えにきてくれた村人の家に、いったん移動した。

日が暮れて、すっかり暗くなって足元も覚束ないところを村の集会場では、大勢の人たちとの夕食となった。大音響の歌とランボンの踊りは、いつ果てるともなく続いたのだった。

(5). 学生たちの村での宿泊

沢田氏と筆者らはヴィエンチャンからの便に、学生たちの宿泊を受け入れる村人へのお礼として配布する毛布と蚊帳30セットを搭乗機に乗せた。このかなりの分量になる物資を沢田氏、家常氏、それに筆者の三名で搭乗するプロペラ機に積み込んだ。

こうして1月30日の午後、ルアンパバーンで2団体の学生たちと落ち合い、翌日1月31日の朝、チャータしたバスで通訳として雇用したヴィトン君も同乗して、北13号の道路をホエイカン村に向った。沢田氏は市場に出かけて村では簡単に入手できない、学生たちが必要になる分の飲み水、トイレット・ペーパー、子どもたちの昼食のときの手洗い習慣のための石鹸、そしてペットボトルの飲み水が用意された。

到着の夕べ、そして出発の朝のあわたたしい時に沢田氏が調達して学生たちに配布

した宿泊セット。私にももらった中味は石鹼1個とトイレペーパー1巻きに混じって、ティシュペーパーのつもりが、女子学生向けのタンポンが入っていたのには、なんともおかしかったが氏の心遣いが忍ばれた。

6. 一夜明けて、学生たちが用意したプログラム

(1). よく工夫されていたプログラム

それぞれ村人の家に一泊した翌日。この日は学生たちが学習プログラムを用意していた。二教室分のスペースに着席した子どもたちに、まず手作りの紙芝居「三匹の子ブタ」が演じられた。子どもたちに良くわかる内容で、笑い拍手が続いた。

続いて、新聞紙を使ったマジックにも子どもたちはびっくり。その後、鉛筆2本と日本の支援者が作って現地到着した、表紙にきれいでかわいい図柄が貼ってある手作りノートが子どもたち一人ひとりに配布された。

この手作りノートをさっそく使って、かんたんながら算数の加減乗除の小テストと採点が行われた。これは多数の学生たちが参加してこそ実現できることだった。学生たちが手分けして点検して、ぐるぐると丸印をもらって喜ぶ子どもたちが多かった。

短い休憩時間があって、筆者は通訳のヴィトン君に通訳してもらって、子どもたちの

なかから男の子、女の子の一人ずつに立ってもらって、ここまでの感想を訊ねてみた。ヴィトン君が指名した二人は、その場の子どもたちを代表して「もう、胸がはじけそうなくらい嬉しい。とてもとても楽しい。こんなことは生まれてはじめて・・・」と話してくれたのだった。

最後は色紙を使った紙飛行機の折り紙。これを屋外に持ち出して、いっせいに飛ばして遊びに興じたのだった。用意していたサッカー・ボールを蹴ったり、ほこりまみれになりながらも鬼ごっこをはじめたり、もうこうなると学生たちと子どもたちの元気の爆発。笑い声と歓声がこだましたのだった。

(2). そして別れがたい思い—村を去るときのこと

元気いっぱい遊んだあとは、村人が用意したモチ米ごはんとゆで玉子の給食ランチ。これに学生たちが日本から持参したフリカケ2袋ずつ。この頃になると、一人の学生に数名の子どもがなついて離れなくなってきている。

このあわただしいなか、沢田氏みずからが子どもたちに給食前に石鹼を使った手洗いのお手本をしめして、なんとか習慣づけようとして取り組まれている姿が印象的だった。

わたしたちと学生たちに用意されたモチ



写真3

譲渡式に参加した子どもたちと村人たち



写真4

二つの学生団体の参加者たちと子どもたち

米ごはんは、学校に通学していない子どもたちにもわけ与えることにして、そろそろプランパーンに帰る時刻が迫ってくる。その頃になると迎えるバスも姿を見せている。けれど子どもたちは別れがたく、学生たちの手を、そして服をつかんで放そうともしなくなってくる。学生たちの手首には、前日のパーシで結んだたくさんの木綿糸がまるで腕時計くらいの太さになっていた。

荷物をバスに積み込む頃ともなると、子どもたちの中には泣き出すのが増えてくる。まるできぬぎぬの別れを見る思いだった。この子どもたちが、日頃いかに刺激が少なく、心の底から楽しむことが少なかったのか思い知らされる。

こうして筆者にとっては、これまでの常識、役人的な発想を超越した譲渡式に参加する機会であり、とても新鮮で刺激的な時間だった。

II. 校舎建設を支援している NPO 法人 DEFC

1. 校舎建設の舞台裏－沢田誠二氏とサイサモン女史のこと

(1). キーパーソン－沢田誠二氏

ラオスの学校制度は、5－7－4年制。



写真 5

子どもたちに手洗いの習慣を教える沢田誠二氏

小学校5年間は義務教育である。ホエイカン村には、もともと小学校があったが、近隣の学校とおなじく老朽化がひどく授業も満足にできなかった。この実情を知悉していたのが沢田氏である。また、同氏の片腕となつて、現地で共同して教育協力を携わつてきているサイサモン女史である。

同氏は、筆者と同期に京都教育大で定年を迎え、ただちにラオス教育省に JICA 個別派遣専門家として 2003 年 4 月から 2006 年 9 月まで二年半の赴任経験がある。京都教育大学では化学を専門分野とする理科教育が担当だった。タイでも理数科教育の JICA 専門家として活躍した経験を持っている。

同氏はラオスには、はじめての赴任だったが現地 JICA 事務所が秘書をつける対応をして、採用されたのが、そのうち長く教育協力を共にすることになるサイサモン女史(49 才)である。沢田氏が専門家の二年半を通じて彼女を絶大な信頼を寄せる人柄と力量の持ち主と見極め、任期を終えた後は NPO 法人 DEFC の理事長になり、彼女はラオス側パートナーとして活躍することになる。

学生ボランティア団体の夢が実現するには、沢田氏とサイサモン女史 (Mrs. Sysamone KHASMOUKTHAVONG) の現地サイドの協力コンビが無くてはならないものだっ



写真 6

ヴィエンチャンの Nakonehuang Elementary 校の教室の様子

立っているのが左がサイサモン女史、右は筆者

た。この二人の存在こそ 2006 年末から現時点 2011 年 3 月末までの四年余りの期間に、学生ボランティア団体のほか、ロータリやライオンズクラブ、個人の篤志家の資金を得て 19 校もの校舎建設を実現させた背景となっている。

後に述べるように、学生たちの現地受入れ、バスのチャータから村での宿泊手配、こまかな金銭の授受と支払いなど、あえて言えば氏が、そう呼ばれることは好まないかもしれないがトータル・コーディネータと言える。じつに細かな神経の疲れる作業、それをいつも笑顔で軽々とやっておられて、すべての面で氏の人柄とキャリアが光っている。

(2). サイサモン女史

サイサモン女史は、父親がラオスの元法務大臣を務めたという由緒ある家に生まれ、成長してはモスクワにも国費留学するなど、七か国語に通じているという。私は校舎の譲渡式に先んじて、ヴィエンチャンで彼女が DEFC の沢田氏とともに運営に当たっている学校 Nakonehuang Elementary School) と隣接する図書館 (Tanmixay Community Library) を訪問し、彼女にお世話になる機会を持った。

とりわけ図書館棟には三室ほど訪問者が滞在できる部屋があり、その一つに数泊の宿泊をさせていただき、彼女の人となりに接することができた。

俗な言い方を許されるなら、まさに「肝っ玉母さん」という印象を強くした。三人の子育てと、話好きなご主人ピサイ氏 (Mr. Visay VONGOLOMDENG) の助力をえながら、この国の教育改革に地道ながら手腕を発揮している一部を垣間見る思いだった。

(3). 校舎完成までの舞台裏

校舎完成に至るまでの工事業者との契約業務や複雑なプロセスは、沢田氏とサイサモン女史だけでは処理仕切れない。そのためヴィエンチャン在住歴が長く、日本の商

社を退職した元ビジネスマンの協力を仰いでいるとのことである。

今回のホエイカン村小学校の場合、学生ボランティアの二団体が集めた資金は、それぞれ 75 万円で合計 150 万円。そのうち 10 パーセントは、どうしても最低限度の必要な事務経費に当てている。村人たちには、かなり広い範囲の山林の伐採作業と、その整地作業に長期間の労力奉仕を必要としたため、70 万円を充当したそうである。

これらの契約と調印は、前回の現地訪問だった 2010 年 8 月に、学生ボランティア団体の村での宿泊のときに、ボランティア団体の代表や学生たち、そして沢田氏とサイサモン女史などの立合いのもとに実施されている。また新しく完成する教室の机、椅子、黒板、保管庫などの家具什器は現地の家具工場と詳細を詰めて注文し契約する仕事もある。

このように日本国内で、学生ボランティアが資金集めに苦勞しているとき、現地側では教育関係者、村人、そして建築業者などとの折衝を続けてきている。この部分は沢田氏とサイサモン女史が、最も神経と労力を費やすプロセスである。

譲渡式の当日は、出席した地元の教育局関係者への謝礼は、5 万キープ (約 500 円)。学生の宿泊を受け入れてくれる村人の家にも、同額を出しているという。これらの会計処理は、もっぱら沢田氏と細かな配慮で行われていて、明朗会計となっている。しかし、一人で処理するには極めて苦勞が多いように思えたのだった。

III. 教育協力のひろがり—自助努力、二国間援助事業、そしてボランティア活動

今回の現地での同行参加は、筆者にとって、これまでの教育協力活動に対する視野を広げる機会になった。

教育は、その国の内政の重点である。それだけに第一に自国の政策、財政、制度を背景にした自助努力が優先される。第二は自助努力だけで教育の革新や充実が困難な状況では、他国、あるいは国際機関の援助が期待される。いわゆる二国間、国際間援助である。組織規模の大きな NGO の援助事業もこれに含まれる。

これまでは、ここまでの教育援助が主流だったし、この分野の検討や研究活動も、これらを主要な対象にしてきた。ところが、ここで述べたように、第三の援助というべき協力活動が活発になってきていることに注目したい。これは第一の自助努力、第二の援助事業を補完するものとして、これまでから取り組まれてきたものである。しかし、第二の援助事業が援助疲れとも言える事態に陥る傾向があるとき、たんに特定地点のスポット協力の役割を越えて、効果的な活動を展開していくことが推測できる。

1. 夢を現実にするーネット時代

途上国には、ラオスで代表されるように校舎建設と維持は、村人にまかされている国や地域が少なくない。国家財政が貧窮しているため、小学校は義務教育としながら教師の給料を支給するだけで精一杯なのである。村の学校のことは、村に任せるという行き方である。

村人たちにしてみれば、みずからの食べ物や削ってでも子どもの教育を良くしたい。みずからは満足に学校教育をうけられず、読み書きもろくにできない。それでも、わが子には夢を託したい。この思いは、世界に共通する。村長は、村人の期待や希望を背負って郡の関係者に働きかけるのだが、しだいに老朽化していく校舎を維持することも難しい。

この状況の打開の一つは、さまざまなチャンネルを通じて援助を求めることである。

困っている子ども、教師を救うのは、教

育協力の原点である。本稿のケースは二つの絶妙とも言える光明を示している。

その第一は、現地の教育事情と教育分野の人脈に通じている沢田氏、それを補強し言語の障害なく現地側関係者との折衝に力量を発揮するサイサモン女史との連携という他に替えがたい基盤である。

そして第二は、日本側の学生たちである。彼らは財源は乏しく、その力は小さい。それでも、それを結集して若い時代の可能性に挑戦したい意欲満々の学生ボランティア団体がある。かれらは、ネット時代をネットワーク軽く大学間や地域の壁を乗り越えて、気脈の通じる仲間とつながる。大学や担当教官の存在など、まったく気にしないで自由な発想で思いを同じくする者同士のつながりを広げていく。

フランス人歴史家のジャック・アタリが、その著「21世紀から見た歴史」（作品社）で記している「ノマド」ーノート・パソコン、ケータイ電話、そしてデジカメを持って軽々と世界を移動する人たちーを現実に目にする思いがする。

筆者の見るところ、この二つをつないでいるのが NPO 法人 DEFC で、学生たちはその代表をしている沢田氏に行き当たる。彼らのエネルギーは「ラオスに学校を建てよう」という夢に向う。そうして、学生たちの思いは一步一步実現に向かい始める。イベントを通じて、あるいは街頭募金の活動に取り組みは始める。そこででも多くの苦労や困難に出会うのだが、大学の授業では経験できない喜怒哀楽を味わってきている。

この段階までは素朴な善意が、素朴さの故の純粹さを保ったままパトンをつないで、現地で苦渋にあえいでいる教師や子どもたちを救うことにつながっている。しかし、ネット社会には闇も深い。思わぬ落とし穴がある。このような事例は安直にはビジネスにはなりにくいものながら、それでも濡れ手で泡を目論む者は少なくない。ここに

記したような善意のリンケージが、決して悪意や悪徳に汚されことなく継続することを願うばかりである。

2. 校舎建設への新しい協力活動

ホエイカン村からは、2月1日の夕刻に疲れ気味の学生たちを乗せてプランパーンに帰着。夕刻の便でヴィエンチャンに戻るといふ多忙な沢田氏に、筆者は最後の質問をした。これまで日本は校舎建設を無償協力、草の根協力でも取り組んでいるけれど・・・と水を向けた。氏は「そんな悠長な、労力のかかる取り組みは、時間がもったいない」と一言の返事だった。

確かに現実に校舎とも呼べない老朽化していく教室で、苦勞している教師と子どもたちがいる。待ったなしの対応が必要なのである。時間のかかる手続きや書面のやり取り、調査活動に時間を割くというお役人的なプロセスでは対応しにくい。この行き方は国民の税金を使うのだから、当然の手続きと言えばそれまでのことである。

一方には、本稿に紹介したように日本の学生ボランティア団体のはち切れるばかりのエネルギーとパワーがある。それを生かした素早い対応ができています。それに対応するNPOがあり、現場事情に明るい専門家がいます。橋渡し役として、ぴったりの役割を発揮されている。その状況を目の当たりにして目の覚める思いがしたのである。

1. 中高年者の常識を超越する若者パワー

いまの若者、学生たちを批評する人は多い。しかし、それは彼らの一面を指しているに過ぎない。誰も青春時代に経験した無鉄砲ともいえるチャレンジや冒険心は、決して失われていない。それどころか新時代ならこそその彼らなりの連携を持っている。現地での二日間の校舎譲渡式では、そのことを痛烈に知らされた。

2. ホエイカン村の滞在は、わずか一泊二日ながら・・・

校舎建設というむずかしいハードを実現した一方で、ごく短い時間ながら子どもたちと交流するというソフトの絶妙の組み合わせ結実している。特に無気力だとされる日本の学生たちは、なかなか捨てたものではない。自己表現、自己存在を再確認する絶好の機会となっている。

一過性といえ、それまでだが、現地を訪れた学生たち一人ひとりにとっても、また村の子どもたちにとっても、それぞれに与えたインパクトは大きい。将来、どのような人生を過ごそうとも、必ずや良き記憶として残るに違いない。

なにかのきっかけで思い出して、自分の進路や判断をするときのよりどころにもなるはずである。

3. 学生時代のボランティア活動を経験した人のその後の活動

沢田氏の話しでは、学生時代の一時的な活動だけで終わらない事例もある。大学でボランティア活動を経験した後、日本企業に就職して職場で仲間呼びかけ、ラオスの僻遠の地の一つであるポンサリ州に水道施設の計画を進めている活動家がいるそうである。日本国内に居住しながらできる協力として注目される。

3. 村人の自助努力の課題とフォローアップ

学生ボランティア団体が神戸にオフィスを置くNPO法人DEFECを、そしてラオスで校舎建設に取り組んでいる沢田氏を知り、本格的な募金活動を開始したのは2010年はじめ、ほぼ1年半前のことである。沢田氏とサイサモン女史などの奔走と現地側の協力で、わずか1年半で、現地の校舎建設にこぎつけている。まさにJICAや大使館が標榜している「足の早い、目に見える協力」が実現している。

もちろん、これでよしというわけではな

い。残されている課題は少なくない。

完成した校舎には、電気は来ていない。さいわい村には、道路添いということもあって電気の供給はある。そこから電気を引くことになる。

校舎の前に広がるスペースは、集会だけではなく運動や野外活動に十分な広さがある。が、造成部分が盛り土状態になっているため、安全のためには是非ともフェンスがほしい。この点は、すでに沢田氏が村長に伝えている。

さらに、遊具や鉄棒などもほしい・・・となってくる。いや、それ以前に完成した校舎とトイレのメンテナンスも必要になる。子どもたちに、より良い生活習慣の一環として教室の清掃活動を習慣づけることも大切になる。

校舎建設は、それはそれで完結型の協力である。その後のフォローアップ活動は、もっぱら教師や住民の自助努力で、より良い活用を期待すべきものである。これについては校舎建設と平行して、あるいは譲渡式の後に向けた教師や住民たちの自助努力に具体的な指針を配慮したい。

教師や住民の自助努力に向けて校舎建設を実現させた立場から、子どもたちと教師、そして住民が新しい意識を持ち、日々の暮らしにも役立つ具体的なガイドラインを共同して考えるのである。それによって、彼らの日常の取り組みの手がかりの用意が望まれる。

たとえばバケツ、雑巾、トイレット・ペーパーの供給が伴う。校舎の完成を契機に教育活動を通じて住民が啓発され自助努力が発揮されれば、この種の校舎建設はより大きな意義を持つことになる。

このような発展的な活動が行われれば、校舎建設への協力の意義は、さらに大きなものになるにちがいない。

4. 日本のプレゼンスを継続的に生かせないか

1. 校舎建設は、地元の村人の労働奉仕、作業活動という典型的な参加型によるもの。それだけに、地元の人たちの広い支持と、完成後の維持にも一定の期待ができる。

完成した校舎を贈呈するだけではない滋味がある。

2. 筆者は、この特色を十分に理解したうえで、なお少し欲張った指摘をしておきたい。

ほかでもない黒板のことである。完成した教室に設置される黒板は、地元の大工さん、あるいは家具工場に依頼して作ったものである。その多くは木の板を貼り付け、表面に黒い塗料を塗ったものである。表面は、ザラついている。そのため、最初のうちこそチョークののりがよい。

しかし、数回も書いたり消したりするとチョークの粉が表面の細かなすき間に入ってしまう。濡れ雑巾で拭き取ってもよくは取れない。そのうえ塗料をこすり取ってしまう。このような黒板は、1か月か2か月も活発に使えば、表面が全体に白っぽくなって、チョークで書く文字は、もはや鮮明には見えなくなる。

黒板の劣化とともに授業は、やりづらくなる。しかし先生たちも子どもたちも、これが当たり前のことと思っている。そして「黒板なら、ある」と言う。

これでは、教育と学習の効果は期待できない。

そこで、日本の教室で使っている黒板を、なんとかして現地でも使えるようにしたい。これは、筆者が長年の夢の一つとしてきたもの。

3. 校舎建設が先生して、譲渡式のとき、もし日本の黒板が教室に設置できれば、きっと効果的な授業ができる。そこで、スチール黒板の表面シートを現地に送って、地元

でアッセンブルして教室に設置する。これを実現させたいものである。

おわりに

今回、筆者が同行させていただいたプランパバーンからの北13号線は、DEFCと同代表沢田氏とサイサモン女史による校舎建設協力のメイン・ルートの一つとなっている。DEFC ニュース13号(2010年10月)によれば、このルート沿いの7村で校舎建設、生徒寮の建設協力が決まったとのこと^(*)。それを引用するとワンヒーン村(学生団体SIVIO)、ポンサワーン村とホンサワン村(川内ライオンズクラブ)、ホワイホック村、ラーコック村、パクウー中等学校(いずれも個人篤志家)、そして本稿で紹介したホエイカン村(学生大団、CHISEと夢追い人)となっている。

もっとも、本稿で紹介した事例に先行して、同志社大、立命館大の学生が中心になっている学生国際協力団体のSIVIOは、コン村に2009年と2010年に校舎建設を実現させている。

このような校舎建設への取り組みは資金規模が数百万円程度ながら、現地住民側、そして日本国内の学生ボランティア団体など関わる人々が多数になることもあって、その総合的な意義は極めて大きく、かつ複合的な波及効果が期待できる。基礎教育分野の重要な協力活動であると考えられる。

DEFCと同・代表の沢田氏は、校舎建設だけではなく「残留不発弾啓発教育支援お絵描きコンテスト」を実施するなど、幅広い協力活動に取り組んでいることも記しておきたい。

謝辞

ここに記したルアンパバーンでの前後を含めても3泊4日の短い滞在は、筆者に取っ

て、まるでジェットコースタに乗ったような目まぐるしいものだった。そして、まさに教育協力を考えるうえで目からウロコの時間だった。これまで筆者がスリ・ランカやタイで取り組んできている「良質のスチール黒板供給の協力」、それに続く「基礎レベルの科学教育の教具開発」などは、まだラオスの困窮地域の学校には適合しないことを思い知らされることになった。せめて、この拙文を記して記憶にとどめたいと思う。

ただし、大変あわただしくされている沢田氏への聴取だったため、多分に不正確な記述が含まれている恐れがある。同氏には原稿案に目を通して点検し修正していただき、正確さを期すことにしたが、文責は筆者にある。

この同行参加は、途上国の基礎教育の大切さを痛感している一人として、とても印象的で忘れられないものとなった。この時期(2011年1月～3月)にバンコクに滞在していた筆者にメールと電話のやり取りで、快く参加させていただいた沢田氏、サイサモン女史、それに二つの学生ボランティア団体の学生のみなさんに対しても、たいへん良き機会を与えていただいたことに心から感謝申し上げたい。

*1. DEFC 連絡先

事務所、〒650-0022 神戸市中央区元町通6-7-9、秋毎ビル3F(ただし常駐者はいない)
ブログ、<http://npo-defc.cocolog-nifty.com/blog/>
ホームページ、http://www.geocities.jp/npo_defc/
メール、npo_defc@yahoo.co.jp
代表、沢田誠二 〒610-0353 京田辺市松井ヶ丘1-23-4
メール、seiji.sawada@kzc.biglobe.ne.jp

*2. 所在地は、つぎのとおり。

Nongtha-Dongdok Road Tanmixay Village,
Xaythany District, Vientiane Capital, Lao PDR

